

エーティンガーの自叙伝 : ある敬虔主義者の教養物語

伊藤, 利男

<https://doi.org/10.15017/2332660>

出版情報 : 文學研究. 80, pp.175-210, 1983-02-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

エーティンガーの自叙伝

— ある敬虔主義者の教養物語 —

伊 藤 利 男

—

ドイツ南西部シュヴァーベン地方の精神的土壌は、古くからその深い宗教性と高い思想性によって知られているが、このような土壌を造成するのに大きく貢献したものとして注目されるのは、十七・八世紀この地方で展開されたプロテスタント教会の改革運動、すなわちいわゆるヴュルテンベルク派敬虔主義の活動である。この派の代表的人物としては、ゲーテが『詩と真実』第七巻で「尊敬すべきベンゲル」と呼んでいるあのヨーハン・アルブレヒト・ベンゲルの名前が著明であるが、そのベンゲルに劣らず重要な、「独創的な」^①神学者が、北の賢者ハーマンに対して、「南の賢者」^②と呼ばれるフリードリヒ・クリストフ・エーティンガーである。一般にはあまり聞きなれない名前であるが、ヘルマン・ヘッセの書簡集には、『ガラス玉演戯』の準備期にあたる一九三四年から三五年にかけて、ベンゲルと並んでこの名前が散見される。ヘッセ没後の一九六五年ニノン夫人によって公表された『ヨーゼフ・クネヒトの第四の履歴』には彼のエーティンガーに対する関心が反映されていることも、すでに指摘されているところである。^③

エーティンガーの自叙伝

そこで最初にエーティンガーの履歴のあらましを述べると、彼は一七〇二年五月六日ゲッピンゲンの中流知識階級の市民の家に生れた。父は市役所と代官所を兼務する書記官であり、母はテュービンゲンの代官を勤めるヴェルフィング家の娘であった。十五歳から三年間ブラウボイレン修道院付属学校で過ごし、つづく二年間ベーベンハウゼンの修道院付属上級学校に学んだエーティンガーは一七二二年、当時シュティペンディウムあるいはシュティフトと呼ばれるテュービンゲン大学神学部に入學した。一七二五年マギステルの学位を取得したのちも、彼は大学で研究を継続していたが、二九年、慣例にならって研修旅行に出発し、フランクフルト、イエーナ、ハレ、ヘルンフトなど、いづれも敬虔主義と深い関係をもつ土地に滞在した。翌三〇年の十二月帰郷した彼は、シュティフトの復習教師の職についたが、三三年ふたび研修の旅に出発し、ドイツ各地に滞在したのみならず、一時期はオランダにも足をのびした。三七年帰郷、まもなくテュービンゲンの復習教師に復職した。翌三八年ヴェルテンベルク公国宗教局はエーティンガーをカルブ近郊の小村ヒルザウの牧師に任命した。彼は同年四月に結婚したウーラハ生れの新妻ドロテアを伴って任地に赴いた。それ以後四十数年間、その間に数回任地がかわり、地位も多少は上昇したものの、この十八世紀ヴェルテンベルクが産んだ最も独創的な神学者は、いなか牧師の職をまもって、最後は監督長牧師として一七八二年二月十日ムルハルトにおいて八十年の生涯をとじた。

以上のごとく概観するかぎりでは、ヴェルテンベルクの牧師としてむしろ平凡な経歴をふんだエーティンガーが、ことさらに「独創的な」神学者と呼ばれるゆえんは、波瀾にみちた思想的遍歴、心のうちなる人生闘争にある。一七三一年に発表された『ヤーコプ・ペーメの著作物を読むよう励ますもろの根拠』⁵⁾に始まる彼の多数の論文、著書、あるいは説教集は、それぞれ彼の思想的発展の各段階を示すものである。しかし多方面にわたるこれら著作の相互関連は読者にとって必ずしも明確ではなく、また二度目の旅行中ライプツィヒで書かれた『神が人間の姿をとって現われる究めがたい道』⁶⁾のような異端の嫌疑を受ける恐れのある書物もあり、さらに一時期著作活動を制限されたこ

とさえあった。六十歳になったエーティンガーは、みずからの思想の歩みを回顧して、このような多様な著作が生れるにいたった個々の事情を明らかにして、それら著作を思想的に関係づけること、いや、もっと根本にさかのぼって自分の思想のそもそもの根源をたずね、それがどのように成長発展して現在の思想へと形成されてきたかを明らかにすることが、ぜひとも必要であると考えたにちがいない。彼は一七六四年（一説には六二年）自叙伝を書いて、これを『一神学者の現実に合致した思想の成立史』と名づけた。著者手稿は現存せず、当初はいく種類かの写本が流布し、そのうちの一つが一八一八年に初めて印刷された。本稿の以下の論述はレッスレによる最も新しい刊行本に拠ることとし、そこからの引用には末尾に数字を付して原典のページを示すことにする。また引用文中の「」のなかの記述は、筆者による補足である。

二

エーティンガーの自叙伝は、他の敬虔主義的自叙伝に共通する要素をいくつか含みながら、またいくつかを欠き、代って多くの独創的な特徴をそなえている。レッスレはこの自叙伝を時期にしたがって十章に分け、それぞれに見出しを掲げている。その最初の章は『幼年時代と小学校時代』という題がついているが、その書き出しにすでに右に述べた独創的な特徴の一つが表れている。

「私がいたいけない幼児だったころ、ひとの腕にだかれた私に注意を払ってくれた人々の話によると、私は単純なおとなし坊やと呼ばれていたという。私はショルドルフでアグネス・ヴェルフィングという名前のたいそう賢い結婚前の女性に育てられた。私を腕にだいたときの彼女の真剣な様子を私はまだおぼえている。人々の話では、私の顔にはあまり表情がなかった、私は長い時間ある一隅をじっと見つめることができた、活動欲は盛んなのに物静かな性

質だったという。だから私はこういう名前と呼ばれたのである」(17)

たいていの敬虔主義者の自叙伝は、まず誕生の日付を書き、次に両親を紹介し、洗礼の模様へと筆を移していく。ところがエーティンガーは、これらの要素をいっさい省略して、自分の記憶に残っていることしか書かない。彼の記憶に残る「単純なおとなし坊や」という呼び名が意味するものは、集中力、活動力、抑制力というような生来の心理的・性格的特性である。ところで、最幼年期の記憶のなかにのちの人生全体の発展の秘密を多く鍵がかくされていると考えるのが、精神分析の創始者フロイトであるが、エーティンガーは自分の最も古い思出をまっさきに述べる理由として、右の引用に続いて次のように書いている。

「このような事柄をもちだしてもあまり役にたたないかも知れないが、しかし神は、詩篇すべての証言と聖書の言葉すべてによれば、人間の心をあらゆる外的な偶然的出来事ないし摂理を通じて、同様にまた内に秘められたものもろの傾向によって形成するのであるから、このような事柄は、現実^にに合致した思想、単なる幻影的な見せかけでない観念が、どのようにして産みだされ形成されるか、ということを示すのに役立つのである」(17)

この発言に明らかなき思想は、人間の心、思想、観念、要するに人間は形成されるものであるという考えである。他の敬虔主義者たちは、人間は摂理、彼らが好んで使う言葉でいえば、神の先慮によって正しい目標に導かれるものであると信ずるが、しかし形成という考え方は彼らにはほとんど見当らない。しかしまた、エーティンガーの、人間を形成するのは人間自身でなくて、神であるという考え方は、彼もまた敬虔主義の人生観の枠内にとどまっていることを示すものである。神が人間の心を外的な偶然的事件ないし摂理と、内に秘められた諸傾向を通じて形成するという考えは、あえて、神を見失った現代の言葉で言いかえれば、環境と素質が人間形成に決定的な役割を演ずるという思想であろう。そういう現代思想との決定的な違いは、エーティンガーが素質と環境を人間形成のための神の手段として把握している点にある。いずれにせよ、この書き出しの一ページは、彼の自叙伝が、この単純なおとなし坊やが

どのようにして独創的な思想家に形成されていくかの教養物語であることを、予示している。

右の引用に続いて語られる二つの体験は、エーティンガーののちの思想形成に大きな影響をもつものとして、彼自身把握している。それは以下のごとくである。シヨルンドルフからゲッピンゲンへ戻ったエーティンガーは、同居している母方の伯父から初等教育を受けるが、この伯父は敬虔の念あついで、幼い彼に多数の賛美歌を暗誦させ、夜寝るまえにそれらの意味もよく分らない一連の歌を唱えさせた。五、六歳ころのある晩のこと、直接引用すると、「私はとうとう少しいらいらしてきて、この歌が分つたらいいがなあ!」と思った。へ悲哀に沈める魂よ、躍りあがって汝の神のみもとへ行け!」という歌の番になった。悲哀というものについて何も知らないながらも私は、躍りあがって神のもとへ行くとは、どういふことか分りたいという気持ちに激しくかりたてられた。私は心のなかで神に、それを分らせてほしいと懸命に求めた。すると、どうだろう! 私は自分が神のなかに躍りこんだと感じたのだ。私はその歌を最後まで唱えおえた。そこには、私の魂のなかに明るい光を残さない言葉は、一語もなかった。私の生涯のあいだに、私はこのとき以上に愉快な気持ちを感じることがない」(18)

これは幼いながらも、まさしく神の体験である。このエーティンガーが生れて初めてもつた神の体験においてまず注目すべきことは、それが非常に楽しいものであったということである。それは幼い心に一種の自信を植えた。たとえば激しい夕立がやってきて、雷鳴がとどろき雷光が走るとき、寝台のカーテンのかげにかくれて震えている父親を尻目に、彼は落ちつきはらって、「ぼくはこわくなんかない、神様にどうお祈りすればいいのか、分っているから」(18)と思ったのである。この自信はさらに、「ぼくが学ぶことはみんな丁度これと同じように理解できるにちがいない」(18)という自信に拡張される。しかし同じころ、彼はまた地獄の体験もする。それは、夜、夢のなかで至福を得ていない死者たちが繋がれた牢獄のありさまを見、彼らの悲鳴をきいて心に植えつけられたこの上もない恐怖の体験である。なぜそのような夢を見たのか、彼は書いていないが、恐らく周囲の大人たちから聞かされた地獄の話

が、夢のなかに再現されたものであろう。いずれにせよ彼は、「あのころのもろもろの印象のなかで、賛美歌の体験が最も快適なものだったのに対して、これは最も怖ろしいものだった。この二つは、私ののちの思想形成に大きな影響をおよぼした」(18—19)と回想するが、しかしそれらの印象がどのような関連によってどのような思想に形成されるか、ということについてはまだ何の分析もおこなっていない。

幼年時代の神とともにある彼の生活にやがて次第にかけがえがさしてくる。それは、父、家庭教師、学校教師の厳格さに起因するものであって、とくに学校教師は、彼が二、三の言葉を暗記できないからといって、殴り叩くの罰をくわえるというぐあいだったので、「私は人生がつくづくいやになり、ついには呪いの言葉に口にするをおぼえ」(19)、まもなく「神にそむいた生活と少年期の罪業」(19)が始まったのである。家庭教師や学校教師の生徒に対する厳しさや体罰は、この時代の自叙伝にはまますみ見受けられるが、エーティンガーの場合注目すべきは、それに対する反発の激しさである。彼はこう書いている。

「私は家庭教師と学校教師がひどく憎らしくて、彼らに毒をのませて仕返しすることができたらいいと思った。私は、もし学校教師が二三の単語のことでまたもや尻をむち打つようなことがあったならば、むしろ腕と脚をひき抜かせるか、それともオランダに出てアメリカ行きの船にのって逃亡してやろうと決心した。このような腹立ちまぎれの意図は、私がすでに気づいていた聖書の崇高な文体を楽しむ気持を押えこんでしまった。私は死んだ兄の肖像を見つめて涙を流し嘆息して、こう思った、ああ、ぼくの悩みを訴えることができる人間が、兄が、生きていてくれたらなあ—」

意趣返しはもちろん実行されなかったが、代りに彼は自分の悩みを詩に綴ろうとして、独力でドイツ語の詩を作ることを学び、さらにラテン語の散文で学校教師を弾劾する文章を書いて父に見せ、「もし自分をこの暴君の学校から退かせてくれなければ、自分は両親がかりそめにも思ってもいないようなことを実行する、といって脅迫した」(21)。

そこで初めて事態の深刻さに気づいた父は、彼を退学させた。

それまでに彼が受けた教育内容の詳細は不明であるが、最も注目すべきは家庭内の宗教教育であろう。彼が生れたときから牧師にしようと考えていた父は、彼に牧師たちのすべての説教を教会から帰ったあと筆記させ、さらにいっしょにひざまづいてお祈りさせるのを常としていた。一方、母親は「高邁で賢明な気質ながら、内面の道には無経験な」(19)女性であったが、息子の教育には父に劣らず熱心だったと見える。彼女は、彼が十四歳になろうとするころのある日曜日、「自分が散歩に出かけようと思つて、私に聖書を読んでいるようにと命令した。母は言つた、聖書を三章ばかり読んでしまふまで、椅子から立ちあがってはなりません」私は思つた、へそうとも、あなたは命令さえすればいいのだ、自分は散歩するから、ほくには聖書を読めというわけだ!」しかし私は後悔の念にせめられて、私自身に言つた、へぼくは読まなくてはならない、だから、読もう!」(19—20)

反抗から後悔、服従へと心のうちは短時間に移り変るが、なぜ後悔したのか、その原因について彼は何の分析もくわえない。いずれにせよ彼はそのとき予言者イザヤの書を見出して、あちこち拾ひ読みする。そのとき彼の心中におこつたことは以下の通りである。

「私は、自分が悪くなつてしまつたこと、幼年時代にもつていた神の引力をなおざりにしてしまつたことが分つていたので、私の悪のすべてを非常に深く感じた。しかし私は、とりわけまた雷をひどくこわがるようになっていたので、神のもとへ戻りたいというひそかな願ひをもつていた。私はイザヤ書第五十章十一—十四の章句が目にはいつた。私はむさぼり読んだ。私はため息をついて自分自身に言つた、へ何と美しいだろう! もしもこんな美しいことがぼくの身におこるのだつたら、回心のしがいがあるだろう!」私は再びむさぼるように読みつづけて、とくに最後の章まで行つて、神は私ではなくて、エルサレムとイスラエルの民たちを相手に語つてゐることが分つた。この書の思想の歩みは、想像もできないくらい美しく思われた。それはいつも私の頭のなかにあつた」(20)

右の回想は、エーティンガーが聖書から受けた最初の強烈な印象であるが、この印象の眼目が美にあることは言うまでもない。この美的印象が最初の瞬間、彼に回心への願望を喚起しながら、回心に直結しなかったのは、彼が、ここに語られている神の言葉が自分自身に向けられたものではないと考えたからにはかならない。事実また、この印象は、すでに見たような教師たちの厳しい折檻に彼が苦しむうちに、忘れられてしまった。しかしそれは永遠に忘れ去られたのではない。彼自身この回想をしめくくる言葉として、「しかしこれは、それにもかかわらず（『そのときは忘れてしまったが・筆者』、一七三九年に出版された私の小冊子『福音の全体的なるもの』の基礎となったのである」と述べているように、この印象はのちに彼の記憶によみがえって、彼の思考方法のいわば原型をつくることになるが、それについては後述する。

宗教教育以外の科目については特に明記されていないが、ラテン語の、それも極めて厳しい教育を受けたことは容易に推測されるし、また恐らくはフランス語も習っただろうと思われる。注目すべきは、彼が学校を退いてからの自発的な読書体験である。彼は「見つけた限りのすべての本、とりわけ歴史書」(21)を読み、「新しい本を買うために、どこへ行っても金をねだり集め」(21)、さらに多数の旅日記、世界各地の博物、植物、動物、珍物に関する書物を読みふけて、そこに唯一の喜びを味わったという。このような読書体験を回想する途中、突然彼は、「私は法律家になり官吏になりたいと思った」(21)と記し、その理由は、「名譽心の上よい」(21)母から、彼女の若いころからの知人で、のちにヘッセン・ダルムシュタット方伯国の宰相になったマスコフスキーなる人物がどんなに好ましく、また有能な政治家兼詩人兼雄弁家兼何何であるか、事こまかく聞かされていたからであると強調する。このように息子に世俗的野心を懸命に鼓吹していた母に関して、同じころ彼は次のような体験をする。

「私はある夜中の一時か二時ころまだその本を読んでいた。突然私は、もう死にそう、という母の悲鳴を聞いた。彼女はひどい咯血に襲われてベットに死んだように横たわっていた。私はそれを見てもつぶし、すぐさま階上の

私の部屋へとびこんで、身を投げだして神のまえにひれ伏し、ひたすら神を信用して、母の命をお助けください、と祈った。母があとで語ったところによると、私がだれよりも一番泣きさげんで祈っているのが聞こえたということである。しかし母が本当に冷たくなってしまったように見えたので、私は神に対してふくれっ面をしてこう言った、
「あなたは残酷な神ではありませんか。ぼくはお祈りによって母を助けていただいたと、すっかり信じこんでいたのに、母は死ぬのですよ」母はしかしエッセンチア・ドウルシスを服用して回復し、次いで私は、神が私の祈りを聞きとどけたもうたことに活気づけられた」(21―22)

以上、エーティンガーの幼少年時代の回想をできる限り忠実に、できる限り省略を避けて紹介したが、それというのも、彼の将来の発展の基礎は、いずれにせよこの時期に形成されたと思なされるからである。彼自身、この時期をしめくくるかのように、右の引用に続いて次のように記している。「これらの摂理のすべては、将来神によって造りあげられるべき私の自然学と神学における思想に向けて、私に心構えをつくらせるものであった」(22)

しかしその一方で、この幼少年期の記述にはある重要な要素が欠落している。それは同年輩の子供たちとの交遊についての回想である。他の敬虔主義者たちの自叙伝には、近隣の子供たちとの交わりによって世俗の悪に感染した例とか、あるいは偏狭な親からそういう交わりを厳禁される例が散見されるが、エーティンガーの場合はそもそも交遊の記述がないのだから、どちらに属していたのか、あるいはそのどちらでもなくて、ふつうの交遊関係をもっていたのか、不明である。ただ、はっきり言えることは、彼の幼少年期には記述にあたいする印象を残すような、つまり思想形成に何らかの影響を与えるような、同年輩の友人がなかった、ということである。

一七一七年、十五歳のエーティンガーは、『ブラウボイレンの修道院学校にて』(第二章)学ぶことになるが、この学校の選択は、名誉心のない母親によって行なわれた。病気がなおった母がこの学校を訪れて、教授ヴァイゼンゼーに会って、彼の礼儀正しき、老練、優雅な話しぶりに魅せられて、息子に、この先生の学校に入りなさい、と

命じたのである。「博物学に精通するのみならず、深遠な神秘主義的神学者であり、ヴェルテンベルク随一の傑出した詩人であり、最もすばらしい雄弁家、最も精密な幾何学者」(22)であるこの先生から、エーティンガーは「神秘主義と祈りとのまったく新しい観念」(22)を伝授され、またこの先生の指導でフェヌロンの『テレマックの冒険』⁽⁶⁾を読んだ。ヴァイセンゼーは夕べの祈りのあと一人一人の生徒に、「一日をどのように過ごしたか、いかなる神の引力が心に及んだか、よい方向へのどのような考えと決心をいだいているか」(23)と質問するのが常であった。ある晩エーティンカーはかつて母に命じられてイザヤ書を読んだときの印象を思いだして、この先生に、「(そこに書かれている主の言葉が)私に向けられていることを、どのようにして知ることができるか」(24)と質問したのである。ヴァイセンゼーは彼に、それはすべての人にむかって言われたことだから、彼にむかっても言われたのだ、と答えたが、その答に彼は満足できなかった。この満足できなかったということが、さらにのちに彼の思想形成にとって重要な過程へとつながっていくが、それについてはまたあとで詳述する。

ブラウボイレン時代で他に注目すべきことは、この地を訪れたハレ派敬虔主義の指導者フランケの「美しい、心底に徹するような講演」(23)を聞いて感動し、彼と識りあいになったことである。また自然の学問、とりわけ化学へのつよい関心が見逃せない。「私は、化学は諸事物の本質にふれる、と考えていた」(23)

三

三年後に進学したベーベンハウゼンの修道院付属上級学校で、エーティンガーは人生で最初の重要な節目をむかえる。それは職業選択の問題である。第三章にあたる『ベーベンハウゼンにて』の初めで彼は、修道院長ホーホシュテッター、付属上級学校教授のヴァイスマンとカンツの名前を挙げ、また彼がしばしば訪問して学習上の助言を求めた

チュービンゲン大学助教教授ビルフィンガーに言及したのち、次のように回想する。

「私は容姿すぐれた若者だった。活気にあふれ、敏捷で、勉強することでも有名だった。だからしばしば私は、法律を学ぶようにとそそのかされた。法律をやったら娘むこにして、世の中でひとかどの者になれるよう援助してやる、という人々がいたのである」(24)。そういう世間の声をうけて母親は彼に法律を学ぶことをしきりに勧めた。彼は半分その気になって、かの有名な法学者トマジウスの本を読んだりした。それというのも、彼はすでに少年時代から、聖餐を受ける儀式に「神聖な畏れ」(25)をいだいていたので、そういう儀式をとりおこなわなければならない牧師になるために神学を学ぶことは、たいへん困難なことだと思い、官吏になろうという考えに強く傾いていたからである。しかし信心深い父は、息子を神学者にしようと決心していたので、「もしもお前が父の決定にそむくような行動をしたならば、という一種のろいをもって」(25)彼をおどしたのである。そこで彼は非常に不安になって、法律を学ぶことの是非を熟考したが、しかしどちらとも決定することはできなかった。彼のこうした迷いの状態を目にした先生たちは、彼をそこから救いだそうとして助言する。ヴァイスマンは、「貴君は聖職者としてよりも俗世の仕事の方にずっと役だつ」(25)と、率直に法律をすすめるが、それに対してエーティンガーは心のなかでこう答える。「先生、あなたはぼくの心中の思いがどんなものであるか、お分りになりませんか！ ぼくの神に献身したいという気持は、外見がほのめかしているよりもずっと大きいのです」(25)

ホーホシュテッターは、彼が、聖俗いずれを選ぶべきか、早く決断できるよう、母の親戚にあたるチュービンゲン大学教授カメララーを訪れて、その意見にしたがうよう助言した。カメララーもまた、彼が神学生になることに断乎反対したが、彼は「ぼくはひそかに神を恐れています」(26)と答えて、ペーベンハウゼンに戻って、その旨をホーホシュテッターに報告した。それからの展開は以下の通りである。

「すると彼はこう言いわたした、へでは貴君の部屋へはいつて神様のまえにひれ伏し、しっかりと決めくださるよう

祈りなさい！」私は矢のように急いで寝室にとびこみ、ひざまづいて、祈ろうと思った。しかし私は祈ることができなかつた。俗世にも神にも丁度同じくらい愛着していたからである。私の気持は、神にむかつて回心しようとしたとき、同じように二つの可能性の間にぶらさがっていたあのアウグスティヌスそっくりだった。

そうするうちに心にこういう思いが浮んできた、豪華な衣裳をまもって人々に命令し、あらゆる名譽の絶頂を極めようとも、それが何になるか。神に仕える方がいいではないか。Deo servire libertas 神に仕エルハ自由ナリ、だ！そこで私は心底から神に乞い求めた、私の魂からこの世に對するあらゆる意図をとり除いてください、と。すると立ちどころにそれはとり除かれた。今や私は、神学にとどまろうと完全に決心した」(26)

この神学への決断に先だつてエーティンガーがアウグスティヌスの『告白』¹⁰を読んでいたかどうかは、不明である。というのも、彼の自叙伝が記述する限りでは、彼がアウグスティヌスを読んだのは、テュービンゲンのマギステル時代のことからである。またドイツ敬虔主義の自叙伝のなかで最も典型的な回心場面をえがくフランケの『回心の発端と過程』¹¹を彼が読んでいたかどうかも、不明であるが、右の二人のそれぞれの回心場面に比較してエーティンガーのそれは、描写がはるかに簡潔であり、二人に顯著に認められるような激動する心情の表現はほとんど見られず、また回心もたらす歓喜の奔流というようなものについても、まったく語られない。もう一つ、フランケとの対比で言えば、彼が回心したのはすでに神学の高度の知識を身につけたのちであつたのに対して、エーティンガーの場合、神学への決断がすなわち回心となつたことが注目される。

この回心が彼にもたらした生活態度の変化は、いかにも敬虔主義的である。

「この時以來、私は別の人間になつた。私はもはやしやれた服を着ず、もはや会合に参加せず、言葉かす少なくとも、神の言葉(＝聖書)を読んで、キケロやその他の世俗著作家の本を読むことをやめた。同じ学校の生徒たちは私の変化を見て、いぶかしく思った。彼らはしばしば小窓から私の部屋をのぞいて、私が祈っているのを見て、そし

て自分たちと一緒に祈ってもらいたいと言ってきたので、私はすなおにそうした」(26)

学問の面では、「世俗的目的を追って学問することは非常に苦痛になったので、私は今すぐにも神学を学んで、哲学は放置しようと考えた」(26)のである。事実、彼はいく人かの神学者の著作を読んで、「神学的真理の根底を、かつてへ躍りあがって汝の神のみもとへ行け！」の歌を理解したときのように明快に、一気に知ろうと思った。しかし何も見つけることはできなかった」(27)彼はさまざまに詮索し、神に祈ったが、求めるものを見出すことができず、不安になって、そのためにからだはやせ細り、くびに腫れものができて、焼灼法で除去することになり、ゲッピンゲンの生家に帰った。

四

この帰省中に彼の宗教思想の形成にとって重要な意味をもつ体験がおこなわれる。それは第四の章にえがかれた『神靈感応者たちとの出会い』である。神靈感応者たちというのは、教会離脱主義者たちの一派で、神霊のお告げによって予言すると自称していた。この派の頭目の一人J・F・ロックがゲッピンゲン出身だったので、この町にはその信奉者が多く住み、エーティンガーも彼らの評判を聞き知っていたと思われる。さて、「俗世から完全に絶縁しよう」と決意」(27)したエーティンガーは、神靈感応者と接触して、次のように考えた。「この人々は自分たちの信条ゆえに捕縛や投獄や笞杖の苦しみに耐えている。しかし教会の牧師や監督が何かの苦しみを受けるということは、決してない。この人々の方が牧師たちよりもずっと使徒に似ているのだ」(27)。この考えは、教会離脱主義への萌芽を示すものと言えよう。しかしその一方で彼は、「事柄を最も精確に吟味して、彼らが神の下僕であるか、それとも彼ら自身の霊に欺かれているのかどうか、神の真理にしたがって探究する」(28)必要があると考えた。そこで彼は神靈感

応者たちが書いた本を通読して、それを聖書のなかのすべての予言者たちの発言と比較考察するのである。そうして見出したのは、「神靈感応者たちはたしかに予言者たちの言い回しを多く採用しているが、予言者たちのような文体、神の王国の事物について証言する予言者たちのような力は、そこにはない」(28)ということである。さらに彼は言葉が続けて、「彼らの道徳はたしかに善良ではあるが、しかしあまりにも通俗的すぎるように、私には思われた。それに対して予言者たちに私は、最高の事物と最低の事物が結びつけられて、一つの統一的な所作となっている聖なる舞台を見たが、これと神靈感応者たちの語る言葉など比較することもできないものだった」(28)と言う。

このような多分に美学的な評価をえたあと、彼が行なった次なる検証は、予言する霊は本来いかなる特徴をもつか、また高級な予言と並んで、誤りをおかす可能性がある低級な予言が存在するか、ということを探ることに探ってみることであった。その上でさらに彼は、彼自身が神靈感応者たちから最初に受けたあの彼らに好意的な印象が、そもそも狂信に感染しているのではないかどうか検証するために、ビルフィンガーからすすめられたある論理学書に基いて、彼らの考え方の論理的整合性を聖書のそれと比較検討してみた。その結果彼は、神靈感応者たちの考え方は論理的整合性が乏しいことを見出したが、しかし彼らを神のにせ下僕と断定するだけの確信は、まだ得ることができなかった。彼らと最初に接触してからすでに九カ月がたっていた。そして最後に彼はこの問題を神のまえに持ちだしたのである。以下、直接に引用すると、「そんなわけで私はとうとう私の屋根裏部屋にはいつて、ひざまづいて顔を床につけ、こう言った、ヘイエスよ、もしあなたが現在この世を弟子たちをつれて歩いていらしたならば、私は三、四日のうちにあなたを試してしまつたことでしょう。しかし私はこの人々を試すことができないのです。あなたはこう言われました、へもしわたしがきて彼らと語らなかつたならば、彼らは罪を犯さないとすんだであろう。しかし今となつては、彼らには、その罪について言いのがれる道がない」(ヨハネによる福音書第一五章二二) しかし私は語つた、へ主よ、私は自信をもってこう言いたてることができません、私はだれかを弾劾することを好まない、と。

あなたはいろいろな下僕をおもちです。しかし私は、彼らを弾効することも、また受けいれることもできないのですから、彼らから離れます。このようにして私は、理性的熟慮に基いて、また同様に内なる真理感情にしたがって、実際に彼らから解放された」(29)

ちなみに神靈感応者たちは、エーティンガーがテュービンゲンの神学生になったのち、彼のもとへ秘かに使者を送ってよこし、神の裁きがくだるだろうと脅迫した、ということである。さて、筆者がエーティンガーの神靈感応者たちに対する検証の過程をこのように詳細に紹介したのは、「この〔検証の〕修練のあいだに」(29)あのイザヤ書がかつて彼に与えた、そしてヴァイセンゼーからは不十分な解答しか与えられなかった問題について、彼みずからが十分に納得できる解答を見出すからである。つまり、彼はこの問題を考えるに当って、「自分の未検証の判断を自分の最大の誘惑者と見なし」(30)、「論理学は、それが他の補助手段とともに用いられるならば、神のたまものである、と考え」(30)て、「理性にしたがって次のように推論した。すなわち、イエスはヨハネによる福音書第六章四五(「予言者の書に、人彼らはみな神に教えられるであろう」と書いてある。父から聞いて学んだ者は、みなわたしに来るのである」)において、予言者「イザヤ」が最後の時代にむけ、そしてすべての民に対して語ったことを、イエスのまわりにいるユダヤ人たちにむけて言われた、と解した。このように、イエスがそれがむけられていると解するその時代は、イザヤがむけて言った時代にはるかに先立つのだから、私は、私の推論が正しければ、それを当然また私のこの時代にむけられている、と解することができる。したがってイザヤ書第五章の言葉はたしかに私自身にむけられているのであり、したがって私は、もしその当時生きていたならば、ペトロやヤコブやヨハネと同じように、きっとイエスの弟子だったであろう」(30)

この結論それ自体は、とりたてて非凡なものではなく、特にその前半部(「イザヤ書第五章の言葉はたしかに私自身にむけられている」)はすでにヴァイセンゼーが彼に答えたとうりのものである。しかし、この結論にいたる

までの探究と思考の過程は、大いに注目すべきものであろう。さらにこの問題の発端をふり返ってみると、それは、「内面の道に未経験な」母の命令によって、彼がたまたまイザヤ書を開いた結果もたらされた問題であり、そしてその解決は神靈感応者たちとの接触が機縁となつて、彼らの言説と、論理学ならびに聖書をたよりに対質した、いわばその副産物として与えられたのである。こういう過程の全体に敬虔主義者エーティンガーが、神の摂理を見るのは、きわめて容易なことと言わなくてはならない。

ところで、彼が見出したイザヤ書の言葉の解釈は、これを思想と呼んだならば誇張のそしりを免れないであろうが、彼の神靈感応者たちとの対質と同様に、ひとつの思想的いとなみであることは明白である。そしてこの思想的いとなみは、彼ののちの思想形成のためのいわば雛型であつて、この雛型は彼がさまざまな研究と出会いを重ねるにしたがつて、成熟していくのである。

五

摂理という言葉の意味は、敬虔主義者、とりわけエーティンガーの場合は、私たちが現在解するよりもずっと広く、自然現象までも含めてこの世に生起するいっさいの事象をさすようであるが、そのなかで最も重要なのは、人と人との出会いであろう。『一神学者の現実合致した思想の成立史』は、書名の生硬さにもかかわらず、特にこの出会いの側面に光をあててみると、にわかには自叙伝としての、ある意味では人間くさい光彩を放ってくるのである。

エーティンガーが信仰あつた父と「内面の道に未経験な」母をもってこの世に生れたことが、彼の人生のそもそも最初の出合いであるが、それ以降ペーベンハウゼン時代までの主な出会いについては、すでに述べた。彼がチュービンゲンの大学に入ると、出会いはいっそう活発、多様になるが、それは現に生きている人々のみならず、講義や読書

を通じての先人たちとの出会いでもある。第五の章『テュービンゲンのシティフトにて』はこれらの出会いをえがいている。彼が師事した若い助教ビルフインガーは、ブラウボーレン修道院長の息子であつて、啓蒙主義哲学者として有名なクリスチアン・ヴォルフの弟子だつた。彼は論理学、形而上学、数学、代数学などを講義したが、その際たえずマールブランシュ哲学を引きあひに出したので、エーティンガーは一時期マールブランシュに没頭する。神学への決断をしたとき放棄したはずの哲学に精を出す理由について、彼は職業上、学位試験の副科目としての哲学に精通せねばならなかつた、と述べている。ビルフインガーはまたライプニッツの单子論哲学についても講じたが、エーティンガーはそれを次のように受けとめた。「そこで私はライプニッツの单子論に没入した。私は自信にみちて、単子論にへブル人への手紙第一章三の、目に見えないものから目に見えるものが生まれた、という言葉を開係づけた。私は、物質とは第一次の単子が積みかさねられて秩序正しく現象したものにすぎず、私の手が触れるすべての物体のなかには、そのような単子の何百万もがびったりと寄り集まっているのだ、と信じた。私は、単一の物はみずからのなかに動かす力をもつことができず、また魂もちええない、と信じた。魂が肉体に対して影響を及ぼすという考えは、ひとを迷わすものだ、と考えた。さて、魂は肉体に対して、肉体は魂に対して、影響を及ぼすことができないのだから、神は肉体と魂をその運動と思考に関して予め二つの時計のように並置して合わせておいたにちがいない、と考えたのである」(32)

このような考えが誤りであることを彼はのちになって知るが、それはまたしても神によってただされたのである。右の引用に続いて彼はこう述べる。「しかし神はその後長いこと、私が私の思想のこのような基礎形成を放棄して、それを造りかえるまで、つまり予言者と使徒たちの根本思想にしたがつて造りかえるまで、私の心の奥底に大きな痛みを与えて私を苦しめられたのである」(32)

彼はまた、マールブランシュ哲学から次のような考えをつくりあげた。「永遠なる言葉のなかに人類の世界出現以

前の原因が存在し、そのなかにすべての人間は、あたかも母胎に包まれているごとくに、包みこまれていた。人間の生殖行動によって人間たちは次々に産みだされてきた。人間一人一人の原型はすでに存在していて、それが生殖と生誕によって人間となったのだ」(34)

彼はこの考えからもまたのちに「神の特別の摂理」(34)によって解放されることになる。それは次章で明らかになる。彼がこの時期に読んだものとしては他に教会離脱主義者フェンデの書物があるが、これはフェンデの師であり、フランクフルト在住の教会離脱主義者としてドイツ敬虔主義の創始者シュペーナー⁽³⁾の友人であったシュッツの教えを宣伝するものであり、またシュッツがユダヤ神秘主義から汲みとったアリウス主義を新約聖書の表現で包んだものであるという。

大学生活はエーティンガーに多くの友人をもたらした。彼はそのうちの数名の名を挙げて紹介しているが、なかでも、のちにチュービンゲン大学の教授になったロイスについては、ビルフィンガーについてと同様に、簡単なながらも特性描写を行なっていることが注目される。ビルフィンガーについてはこうである。「彼は〔私と〕同様に水銀質だが、しかしすでに安定した気質をもち、表象能力がすばらしかったので、何かある問題を鋭く考えつめているとき、時として失神して椅子からころがり落ちた。しかし彼は自分の活発性に対して、英知の方則によって、論理学と数学、その他彼がシュティフトの復習教師になってからもまだ続けた手、足、眼、口、耳による学問的な修練によって抵抗していた」(31)。ロイスについて、「ロイスは私とは正反対の明朗な気質をもち、それは彼の美しい青い眼を見れば分った」(35)

特性描写は敬虔主義一般の、特に初期敬虔主義者の自叙伝には、ほとんど見当らないものである。『詩と真実』におけるゲーテが特性描写にどんなに見事な腕前をもっているかは、周知のとおりである。エーティンガーはその後出会った人のいく人かについても特性描写を試みているが、出色は医師ケンプについてのものであろう。これについて

は後述する。この学生時代、エーティンガー自身の精神の状態はどうであったか。彼は、右に引用したロイスについての記述に続いて次のように述べている。

「それに対して私は、神学的な勘考にひどく没入していたので、その当時は数学にそれほど注意を払うことができなかった。ビルフィンガーはしばしば私を愛に思って、私が憂鬱におちいっているにちがいない、さもなくば数学がもっとよくできるはずだ、と言った。彼は、神が私の心底を唯一最高の対象、すなわち神の栄光に向けられたので、私はその対象から離れることができないということをも、もちろん知らなかった。(中略)それで彼は、私が憂鬱におちいっていると見たのである」(35)。また学友の一人であるシュタインホーフアーは、マールブランシュ哲学にかかわりあって人類の世界出現前の原図を懸命にあなたためているエーティンガーを批判した。こうした状況を回想してエーティンガーは、「私は心に安らぎがなく、そのため昼も夜も新約聖書を読んでいた」(35)と記している。

こうした不安の最中にエーティンガーは『ヤーコプ・ベーム¹⁸の著作を識る』(第六章) ことになる。学生時代のみならず生涯を通じて恐らくは最も重要なこの出会いを、彼は次のように書きはじめる。

「神の摂理によって私は、頭を休めるため散歩するとき、テュービンゲンの火薬工場のまえを通りかかることがしばしばあったが、そこで最大の夢想家であるその火薬製造人に会った。彼は、自分の計算どおりにバベルが崩壊するとき安全でいられるよう、地中に深い穴を掘ってあった。彼は私にそういう夢物語を話した。私はいともつつましやかながら彼を笑った。彼は言った、へあなた方神学生は不自由な人々だ、好きなようにキリストを研究することを許されていない。あなた方は強制されたものを勉強しなくてはならない」私は考えた、それは本当だ、しかしそれでも私たちには自由があるではないか、と。彼は言った、へあなた方は、聖書の次にすばらしい本を読むことを禁止されているではないか」私は言った、へどういうことですか」彼は私を自室に招きいれ、ヤーコプ・ベームを見せて、へこれが本物の神学です」と言った。私は初めてその本を読んで、ヤーコプ・ベームが神の七つの霊と(人間の)

の三重の生の諸力をたとえて言う塩、硫黄、水銀というような具象的直観的な言葉が、おそろしくなった。私はそれらの言葉を茶化して帰った。とは言え、私はこれらのまったく具象的かつ直観的な表現が何か理性的なものに思われ、マールブランシュやライプニッツの助けをかりて、この門外漢の概念を修正してやらなくてはならない、と考えた。次のとき、私は彼にその本を貸してくれるよう頼み、そしていっさいの偏見をすててそれを読んだ。そこには私が妄想していた世界出現以前の体系を否定するものが見出された。私は驚いて自分にこう言って聞かせた、お前はヤーコプ・ベームを狂信者と思っていた、ところが今、お前の方がマールブランシュから極端な体系を作りだしていたことが、分つただろう、と」(36)

彼はベームを読み思索するうちに、ベームが、「永遠なる言葉について明瞭に、かつ純粹に語っている」(37)ことを知り、それと同時に彼の、「マールブランシュから引きだした、すべての人間は無限に小さな形で予め作られて存在するという体系は、その言葉の神性についての純粹な教えのまゝに消えうせ」(37)、そのことよって、アリュウ主義とマールブランシュの教えも彼のなかで崩壊した。では、その「永遠なる言葉」とは何か。エーティンガーは次のように述べる。

「永遠なる言葉はヤーコプ・ベームによれば、生成しつつあるものと生成したものが、私も事実そう考えたのであり、またすべてのアリュウ主義者もそう考えているにちがいないが、あたかも母胎のなかにあるかのようにその中に宿って、いわば単子の反映となって静止しているような存在ではない。永遠なる言葉は、神性の最も純粹な運動であって、その限りで、神性は神性それ自身のうちに現われる、あるいは神性はそれ自身を永遠に啓示しつつ常にそれ自身に反抗している。このことは、最も純粹な運動としての神についての私たちの教説(すなわち神は、そのなかに作用をおよぼすもの、作用そのもの、作用を受けたものが存在する永遠なる一者である、という教説)にしたがって語れることを命ずる。そして、私が初めそうであったように、二、三の言葉のゆえに、そのような永遠なる事物に高慢

かつ近視眼的に襲いかかる者たちは、私が神靈感応者たちを検証したときに始まってその後ももちろん、神が私にお教えくださったような忍耐を、いささかもたない者たちである。彼らは我意に固執して、そしてソロモンの箴言に見られる英知の原則にしたがう検証をしないのだ」(37)

このような「永遠の言葉」についての認識は、言うまでもなく、自叙伝を執筆する現在のエーティンガーのものである。最初の出会い以来彼は生涯を通じてベーメの研究にとりくみ、みずからの神学思想の形成に大きな影響を受けたのである。とは言っても、彼はベーメに「奴隸的に従属」⁽¹⁵⁾したわけでも、また「猿まね」⁽¹⁵⁾をしたのでもない。彼は、「論理的な立証のこつをよりよく把握するため」(39-40) 数学に精を出し、ライプニッツとヴォルフの研究を推しすすめ、彼らの著作を徹底的に読んだ。こういう研究に際して彼が原則としたのは、「すべての哲学的観念に対して聖書のなかに対抗物を求める」(41) ことであった。この原則から、彼のベーメ研究も外れることはなかったであらう。

ところで、ライプニッツとヴォルフの哲学は、エーティンガーがベーメを識り、聖書をより深く理解することにより、結局は彼の思想体系から駆逐されるが、その際注目すべきは、彼のなかに一種独特な時代意識が生れたことである。それは他の敬虔主義者たちにもある程度共通するものであって、つまり、現代はもはや初期キリスト教の時代ではないという意識である。彼は次のように述べる。

「ヴォルフの哲学は私のなかに深く根をおろしていたので、私は、自分が聖書のなかに誤った関連をもちこんでいるかも知れない、なぜならば、悪魔は最初の数世紀のところとはちがって、今はもう明白な偽造物ではなくて、もろもろの真理をもって攻撃してきて、それら真理を虚偽の関連で魂のなかに植えつけるのだから、という最大級の心配におちいった」(40)。さらにまたライプニッツとの関連で彼は、「八閨のなから光を呼びだされた神は、私たちの心のなかに明るい光を投げ与えられた」(コリント人への第二の手紙第四章六)、私たちにはこれで十分だ。使徒たちは

これによって互に理解しあったのに、ライプニッツはその単子によっては、どんなに巧みに十分なる根拠の命題を考えたにせよ、自分が何を言っているか、知らなかったのだ。そのような観念は何の重みもない。悪魔はそのような観念によって、学者たちの虚栄心をくすぐって、彼らを聖書からひき離す手品を演ずる。それで彼らは聖書よりも精緻な概念をもっているなどと思うのだ。これは悪魔の奇術だ。(中略)このようなものは今どきの論争者たちが見せびらかす人形芝居以外の何物でもないのに、このようなものに私がどんなにだまされ、追い回されたか、私自身知っている(44—45)と言い、さらに、「どの世紀にとっても、とりわけ、竜(=悪魔)が小羊のごとくに語るであろう現代にとって、闇の靈の原動力を認識することが必要である(45—46)と考える。このような考え方は、原始キリスト教時代の信仰を現代に復興しようという敬虔主義の一般的志向とは趣きをやや異にして、虚偽にみちた現代に生きる賢者の知慧と呼ぶことができようか。以上は『哲学研究』の章の注目すべき事項である。

次の第八章『教父たちとユダヤ律法博士たちの研究』の時期、「神学の根底をきわめるために(46) エーティンガーはまず『ヘルマスの牧者』に始まって、アウグスティヌスとヒエロニムスにいたるまでの十数人の教父の著作を日夜読みつづける。そのなかでとりわけ精読したアウグスティヌスについて、彼は次のように記している。

「アウグスティヌスの書『靈と文字について』のすべての部分を私は特別な真剣さをもって勤考した。その際私は、彼がこの論題を彼の時代のために余すところなく論じつくしたということ、そして今日私たちは、何が問題であるか明らかにするためには、現在の諸論争点に関連させて彼の教説をもちだすこと以外に何も必要としないということが分った。アウグスティヌスは非常に美しい根本概念をもっている。彼は、自分が何を言っているのか、分っていた。アウグスティヌスにはプラトン(の思想)が非常に明るく輝いて見えるが、しかし彼はプラトンにおいて異教的であったり誇張されているものを受けいれなかった。マールブランシュは、自分の哲学を説明し、そして巷にさけぶ英知の声がいかに人間たちに語りかけるかを示すために、アウグスティヌスからかなりの節を書きうつしている。アウグ

ステイヌスがかくも完全な神学者であるのは、彼が第一に文字と霊を、第二に巷にさけぶ英知の声、すなわち哲学を、第三に神の摂理を、みな同程度に自分のうえに作用させ、そうすることによって正しく形成されたからである」(48)。このようにエーティンガーはアウグスティヌスをあたかも自己の理想像であるかのように高く評価するにもかかわらず、ベームからのような強烈な刺戟はこの教父からは受けなかったようである。

エーティンガーが神学の根底をきわめるために用いた「第二の補助手段」(49)は、ユダヤ律法博士(「ラビ」)たちと、彼らが聖書から引きだした哲学の研究であった。彼はベルンハルトなる講師とともに、あるいは独力で、数人のラビを読み、さらにより根源にせまるべくヘブライ神祕主義(「カバラ」)の原典を読もうと考えたが、この最後の意図はさし当って実現されない。

六

人間が出会いの機会に最も多く恵まれるのは、旅である。当時、若い大学人にとって教養旅行は、なかば慣習の行事であったとはいえ、多額の費用を要することであり、だれにでもできるというものではなかったにちがいない。エーティンガーが『最初の旅行』(第九の章)に出る経緯は次のごとくである。マギステルになったあと彼は三人の弟を同居させ、彼らの家庭教師の役をつとめていたが、やがて兄弟四人とも熱病にかかってゲッピンゲンの生家に帰った。以下、直接引用すると、「長いこと続いた病気が治ったあと、私は父に旅行する金を出してくれるよう懇願した。父は僅かな金しかくれなかった。しかしそれにもかかわらず私を旅への切望が追いたてた。私はイエーナに行こうと思った。そこでは、友人ロイスの手紙によると、使徒たちの時代におけるような覚醒が生れているということだった。私はフランクフルト・アム・マイン経由で行った」(50)

彼は、僅かな旅費しかもたないのに、目的地へ直行せず、途中まずフランクフルトに立ち寄ってかなりの期間滞在し、さらに北上してヴィトゲンシュタイン伯爵領のベルブルクを訪れたのち、ようやくイエーナに到着したのであるが、彼にこのような迂路をとらせた旅への切望とは、いったい何であつたのだろうか。それは、予め言うならば、神学探究への熱意と表裏一体をなす教会離脱主義的志向であらう。この志向は、すでに私たちは彼が神靈感応者たちと接触した際に見出したものであるが、その後も彼のなかに生きつづけ、教会離脱主義者でもあつたベーメの研究を通じて恐らくはある程度まで高められ、そして旅行に先立つ一七二八年ころには、シュトゥットガルトの医師カイザーとの交際を通じて、いっそう強くなつていた、と見ることができよう。彼はこの章のなかで次のように述べている。

「当時私は、もし神学にとどまっていたならば自分の信念にのつとつて行動することができなくなるかも知れないという、極めて大きな不安を懐いていて、カイザー医師といっしょのことをしよう、つまり神学を放棄して医者になろうと、すでに固く決心していた。カイザー医師は私と同様にヤコブ・ベーメの非常な崇拜者だつた。彼は厳格な教会離脱主義者で、グイヨン夫人とベーメを、とりわけベーメをこきおろしたが、そのわけは、ベーメが生涯の最期にのぞんで牧師を自分のところへ招いて、牧師の質問を肯定する返辞をしたから、というのであつた」(53)。エーティンガーはカイザーほどには厳格ではなく、カイザーに対して、ベーメが最期に教会離脱主義を捨てたことは赦してやってもいい、と言つたのであるが、しかし彼自身の教会離脱主義的志向もまた右の引用に明瞭である。

このような志向をもつたエーティンガーが最初の滞在地にフランクフルトを選んだのは、ごく自然ななりゆきと言わなくてはならない。そこにはあの著名な教会離脱主義者シュッツの未婚の娘が在住し、またシュッツの弟子フェンデとは彼はかねてから文通する仲だつたのである。老嬢シュッツについて彼はこう回想する。「彼女は大きな資産があつて家具もたくさん持っていたが、結婚を嫌つていた。彼女は瞑想を好み、談話には徹底的な知識がうかがわれた。

若いころ彼女は、著名な法学者だった父上からあらゆる種類の学問と聖書を教えられたからである。彼女が示してくれた好意に対して、私があるとき感謝の念を過大に表わしすぎたところ、彼女は無愛想な顔になったが、そうすることによって私のあまりにわざとらしい丁寧さを罰したのである。わざとらしさは、彼女のまじめな人柄にふさわしくなかった」(50)。彼女は彼にある貴重なカバラに関する書物と多額の賤別を与えた。フェンデは彼にヘイトなるユダヤ人カバラ学者を紹介してくれた。さまざまな問答のなかで彼があるとき、カバラの思想を理解するにはどうすべきか質問すると、ヘイトは、聖書の原文を離れてはいけない、と答え、さらに、キリスト教徒たちはカバラに関して『ゾハル』の書よりも遥かに明晰に語っている書物をもっている、それはヤコブ・ベームだ、と言って、その場でさまざま、ベームの発言がカバラ学者たちのそれと一致することを示してくれた。

フランクフルトを発ったエーティンガーは、郵便馬車のなかで亡命ユグノー教徒マルサイと出会った。この男もまた厳格な教会離脱主義者であって、グイヨン夫人を熱烈に崇拜していたが、エーティンガーが、彼女は私たち人間のために十字架にかけられはしなかった、キリストを崇めるごとく一人間を崇めるものではないと反論すると、ひどく立腹して別れていった。

彼の二番目の滞在地ベルレブルクは、ワイトゲンシュタイン伯爵の寛容政策のもとに安住の地を求めて各地から教会離脱主義者、急進敬虔主義者、神靈感応者やその他の異端宗派の人々が集まり住んだ町として知られている。ここで彼はたまたま、クリスチアヌス・デモクリトウスの筆名で知られる急進敬虔主義者ディッペル(註)と宮廷牧師シュトゥルーエンゼーがヨハネの第一の手紙の一章句をめぐる激論をたたかわせている様を目撃し、「ここからはあまり真理は生れてこない」(54)と心中に思った。前者とはその後、伯爵の食卓でしばしば談話したが、あまり尊敬する気持ちになれなかった。

イエーナについたエーティンガーは、同地を目的地に選ぶ動機となった覚醒運動の中心人物シュパンゲンベルク(註)を

訪れて、その指導のもとに全学部から集まった数十名の学生たちが、「キリストを人々の魂のなかに大きくすべく一致団結している」(55) 様に強く心を打たれた。ある日の集会のあと、彼はなにか講話をするよう求められて、人間にとって必要なものは、単子を基本とする現代の哲学者たちの根本概念ではなくて、イエスと使徒たちがもっている根本概念である、という考えを語った。その最重要点はこうである。「使徒ヨハネはその福音を、^{はじめに}言があった」という言葉で書き始めた。・・・この言葉は人間たちの生命であり光である。光は闇のなかに光った。そして闇はその光を捉えなかった。それがすべての使徒たちの究極の概念である。いっさいのことはこの概念に基づかねばならない。この概念の代りに単子をとり入れる者は、福音のなかに見知らぬ教えをもちこむものだ。しかし、イエス・キリストにかかわるいっさいのことをこの根本概念と結びつけて理解するものは、正道を歩んでいるのだ」(56)

イエーナの覚醒した人々はしかしエーティンガーのこの考えを受けとめることができなかつた。彼は同地を去って、ドイツ敬虔主義の最大の中心地ハレに赴いた。彼は一七二九年から三〇年にかけての冬学期、講師として大学で講義することを許されて、*philosophia sacra*「聖なる哲学」(57)を講じようと考えた。それは、ベーメを識ったときに彼のうちに萌して、聖書研究が深まるにつれて成長してきて、今や彼によって「おもにソロモンの箴言から導きだされなくてはならない」(57)という英知の体系であった。しかし彼の意図は実現されなかつた。学生たちが次第に彼から去っていったようである。その理由として彼は、学生たちが何から何までも筆記する習慣があつて、その上ある教授がすでにあまりにも多数の信奉者たちを集めていたからと言つて弁解するのみで、この失敗について彼自身の反省は見られない。

一学期がすぎて、彼が「聖なる哲学をよりよく植えつけることができぬものか、試してみるために」(57—58) 選んだ次の目標は、ヘルンフートにツィンツェンドルフ伯爵⁽¹⁹⁾の指導のもと建設の途上にあつた同胞教団である。一七三〇年五月ヘルンフートに到着して教団の集会に同席したエーティンガーは、教団の人々が拠り所になっているのは聖書

ではなくて、伯爵が作った賛美歌であることを見てとって、そのことを彼らの前で明言したが、しかし彼らが勧めるままに、ここに滞在する。伯爵がだれにでもその人自身の考えを認め、その人がみずからに忠実であれば満足している点が、彼の気に入ったからである。彼はここで、最初の本『ヤーコプ・ベームの著作物を読むよう励ますもろの根拠』を書いた。ちなみにこの本は彼が帰郷したあとと出版されたが、異端の説をすすめるものとして物議をかもした。この一件について彼は、「ヤーコプ・ベームを読むとき厳守すべき注意事項が印刷人によって削除されて、この本から消えてしまった。この指示なしではこの本は、私の判断するところあまり役にたたない。いずれにせよ、ヤーコプ・ベームによってすでに無数の空想家や幻視者が生れている。しかしシュペーナーやアントーンのような正しい人々がベームの著作物を読むことに没頭したのだから、角を矯めて牛を殺すことはない。私が考えるに、神はベームに超自然的なやり方で自然の諸力の可能性を示されたが、しかし彼は分りにくい表現によって自分自身に疑惑を招いたのだ」(59)と述べている。

一方、ツインツェンドルフは研究と著作にふけるエーティンガーをわけもなく傍観していたのではない。彼はこの学殖ゆたかな客人を自分の意見に同調させ、自分の計画のために利用する機会を待とうと思っていたのである。やがて伯爵は彼にある要務のためフランスへの出張を要請した。彼はヴェルテンベルクの公爵に義務を負う身であるから、公爵の許可が必要であるとこたえた。伯爵は公爵にそのため手紙を書いた。返辞はエーティンガーへの帰国命令だった。三〇年十二月テュービンゲンへ帰ったエーティンガーは、『シュティフトの復習教師』(十番目の章)の職についた。

このエーティンガーとツインツェンドルフの関係ほど分りにくい奇妙な人間関係は、恐らくドイツ敬虔主義の歴史を通じて他に見られないであろう。自分の教団を神の王国につくりあげ自分の信条を世界中にひろめようという使命に燃える聖者と、根本英知を探索し聖なる哲学を現代人の心に深く植えつけることを天職と考える賢者との出会い

は、それ自体ひとつの事件と呼びうるはずのものであるが、しかしそこからは結局のところ積極的な成果はほとんど何も生れなかった。二人の目標が異なるごとく、二人のそれぞれ相手に対する思惑もくい違っていた。一九三三年、ツインツェンドルフはチュービンゲンを訪れて、自分の信仰の正統性の証明を神学部に願いでた。学部長ビルフィンガーはエーティンガーの口添えを容れてその願いを承認した。伯爵はエーティンガーに彼の「聖なる意図」(61)の達成のためにあらゆる支援を惜しまないと約束したので、彼は再びヘルンフトへ赴く決心をした。こうして伯爵と同道して『二度目の旅行』(第十一の章)に出発したエーティンガーは、途中で伯爵と別れてエルフルトに立ち寄ったのち、三三年六月ヘルンフトに到着した。彼は伯爵と一緒に聖書を読み、ギリシャ語とヘブライ語を教え、ソロモンの箴言を解説してやったが、彼本来の目的を達することはできないで、翌年七月同地を去った。この滞在について同胞教団がわの評価は、のちに伯爵の門下にはいったシュパンゲンベルクの手になるツインツェンドルフ伝に次のように記されている。

「(エーティンガーが)提案して collegium biblicum 聖書ノ集ヒがもたれ、原典を前にして討議がなされた。(中略)聖書の翻訳についても話され、またその目的を達しようとする場合に基礎におかれるべき事柄についても論じられた。一つの試みとしてのみ行なおう、ということに意見が一致した。そして実際に新約聖書の翻訳が始められた。しかし私たちの仕事のできばえを観察し、それをルターの翻訳と対照してみると、いつも皆の意見は、ルターの方がすぐれているということに一致した。(ルター訳は)あれやこれやの表現には改善の余地もあろうが、神の思籠おぼによって彼の手になった全体を見ればいい」

通算十八カ月にも及ぶ二度の滞在にもかかわらず、エーティンガーが聖なる目的を達することができなかった理由は、彼のがわからなければ、ツインツェンドルフが神の本物の使徒ではなかったから、ということになる。彼は、私たちがすでに見た『神靈感応者たちとの出会い』において、彼らに対する検証の全過程を記したあと、「しかし神が

私にこのような検証を課されたのは、私がのちにツィンツェンドルフ伯爵を評価することになったとき、どのように判断すべきか、その手本を手に入れるためであった」(29)と述べている。彼は次の『帰郷とヒルザウの牧職就任』以下の各章でも機にふれて、かなり詳細にツィンツェンドルフ批判を行なっているが、最も端的な批判は、この『二度目の旅行』中の次の発言である。「伯爵は全世界の半分をキリストに従属させる計画をたて、この計画の追求にあまりにも懸命だったので、彼の〈凡庸な〉聖書認識は彼をこのような妄想から救い出すことができなかった」(66)

彼のツィンツェンドルフとの関係は、彼のヘルンフト退去をもって断絶したのではなく、のちに伯爵は牧師になったエーティンガーをヒルザウに訪問している。彼が伯爵の宗教理念を完全に否定するまでにはかなりの年月を必要としたことは、それ以後の叙述のなかでしばしばツィンツェンドルフ批判にかなりの紙数を割いていることから明らかである。

さて、ヘルンフト退去後エーティンガーはライプツィヒ、ベルリン、マクデブルク近郊のベルゲン修道院等を経てふたたびハレに赴き、医師ユンカーについて医学を勉強するかたわら、大学で、「聖書、聖なる哲学に必要な事柄、とりわけソロモンの箴言とヨブについて」(67)講義を行なった。医学を学んだのは、かつて医師カイザーと交際したとき考えたことを実行に移す準備にほかならない。そのあと彼はオランダの各地に教会離脱宗派の人々を訪ねたが、長くは滞在することなくドイツに戻り、フランクフルトに近いホンブルクで医学校を開いている医師ケンプの門をたいて約八カ月間診療の実際を学んだ。ケンプは諸学に通じた神学者で、エルザス地方で牧師をしていたが、教会離脱主義的な考え方から医学に転じた人物である。エーティンガーはケンプについて次のようにたいへん好意的な人物描写を行なっている。

「彼の気質はジュピター的で、明るく快活だった。彼は澄んだ青い眼をしていた。この気質を容れる体格は中くらいの大きさで、顔は長円形で、ばら色をしており、ひたいは美しく、その上の髪は長くて、少しばかり黒褐色が

り、声は明るく響いて、眼は時に青く時に黒く変わり、眉毛は高くつりあがり、鼻はかるく弯曲し、口は大きく、上唇が下唇より大きくて、その下唇は丸く、肩は幅広く、手と足はたくましかった。身のこなしは非常に円満かつ温和で、話し方は慎重、寡黙、遠慮がちで、行動のすべてには愛情がこもり、無駄がなく、子供好きで、真剣な事柄に關しては思慮深く、公正、清潔、慈悲を心得ていた。彼は立腹時もおのれを抑えるすべを知り、欲望をかくし、そのほかの時でも、すべてを平和に転ずることができた」(68—69)

ケンプはエーティンガーに、バベル同然のルター教会を離れ、神学から医学に乗りかえるよう熱心に勧めたが、彼にはその決心がつかなかった。

七

一七三七年夏、長い旅行から故郷に帰ったエーティンガーは、神学にとどまるべきか、それとも医者になるべきか、という困難な選択をせまられるが、しかしみずから決断をくだすことはできなかった。その経過を彼は、『帰郷とヒルザウの牧職就任』の章でこう述べている。

「ヴェルテンベルク公国の」宗教局は、私の〔旅行中に書いた〕『神が人間の姿をとって現れることについて』の本やその他の疑惑のゆえに、私が三たび国外へ出てくれたらいい、という意向だったので、私は、いずれにせよ自分は医学を学んだ、もし宗教局首脳各位が私を疑わしいと見なされるならば、私が医者になるよう命令していただきたい、と申し述べた。しかし宗教局はいかなる決定もくださなかった。そこで私は〔従前の〕の職分にしたがって復習教師としてチュービンゲンへ赴き、そして一七三八年になってようやく、ゲッピンゲンの次席牧師の代りに、というのは最初にあまりにも広すぎる教区をもつことを怖れたからであるが、小さなヒルザウの村の牧師職を引きうけた」

いずれにせよこの経緯は、これまで彼が教会離脱主義的傾向を次第につよめ、離脱にそなえて医学を修得したという事実を知る読者には、ある種の割りきれない印象を与えざるをえない。というのも、「もし神学にとどまっていたならば自分の信念にのっとって行動することができなくなるかも知れない」という彼のかつての疑惑は、強まりこそすれ、決して解消されていなかったからである。彼自身は、自分が牧職についてたことの理由としてであろうが、彼がライプツィヒで訪問したヴァハターなる教養高い市井の学者から、「ぜひとも正規の職につきなさい、さもないと私のように後悔することになりますよ」(72)と強く勧められたことに言及しているが、しかし、この勧めによって牧職への不安が解消したとは書いていない。しかし他方では、教会離脱主義への疑惑もまた彼の心中にひそんでいた可能性も指摘できよう。というのも、彼の記憶のなかには、かの厳格な教会離脱主義者カイザーがベーメを、死の直前になつて教会離脱主義を捨てたことを理由に、こきおろしたことが、消しがたくとどめられていて、教会離脱主義を貫きとおすことがどんなに困難なわざか、彼は十分承知していたと思われるからである。ちなみに『最初の旅行』の章には、この旅行中に出会ったあのマルサイもずつとのちになってやはり教会に復帰したこと、そのことに刺戟されてカイザー自身も反教会主義の誤りに気づいたことが付言されている。大著『敬虔主義の歴史』の著者リッチュルは、エーティンガーの牧師就任の理由について、「彼は明らかに教会離脱を思案することにくたびれはて疲れきってしまった^(20a)」と述べているが、彼が疲れきっていたことは確かであろう。というのも彼は、かつて法律と神学のいずれを選ぶかの問題に当面したときのような、ことの是非を慎重に比較検討する手続きを踏んだとは見えないからである。牧職につくに至った心境として彼が述べていることは、「私は旅に出て、敬虔な人々や学者たちのなかに入ってあまり和合することができなかったので、最後にこう考えた、小さな村の牧職の方が、他の人々とつきあうよりも、真理を追究する自由が多いだろう、と」(73)という発言に尽きる。

こうして疑惑を残したまま牧師となったエーティンガーではあるが、牧師としての活動や教区民との関係については、彼の自叙伝が述べているのは、三番目の任地ワルトドルフ時代（一七四六―五二）、「私は教区民たちに大いに信仰心をふるい起こさせた」（90）ということ、その次の任地ヴァインスベルク（一七五二―五九）である小学校教師が彼の妻と娘を中傷する噂をまきちらしたことに関連して、「私は地獄に由来するたくさんの嘘によって非常な試練を受けた」（93）ということくらいである。ヴァインスベルク以外の任地では教区民とのあいだに特別ないざこざもなかったようで、彼は真理探究と著作にはげむことができた。

一七四三年彼はヒルザウからシュナイトハイムに転任した。近くのヘルブレヒティンゲンに、彼がマガステルになったばかりのころに知遇をえたベンゲルが監督教区長牧師を勤めていたので、その近くの教区を希望したのである。彼は深く尊敬するこの「神の下僕」（83）をしばしば訪問し、またベンゲルも時おり彼の所へ出かけてきた。

このシュナイトハイム時代で最も注目すべきことは、「私の神学はようやくにして、私の信ずることが疑いもなく正しいと信ずるまでになった」（83）ことである。こうして自分の神学にもはや疑惑をもたなくなったエーティンガーは、錬金術師たちの著作を読みはじめたが、それはかつてブラウボイレンの修道院学校生徒時代にめざめた自然探究への懼れの延長線上のものであって、「聖書のなかの自然に関する教えを理解するのに大きな貢献をし、またこの自然に関する教えが聖書そのものの認識に役立つ」（84）からであった。この認識に基づいて彼は、その後現在にいたるまでも余暇を利用してみずから「実用化学」（84）の実験をおこなっている、と述べているが、こうした上層当局から疑惑を招く恐れのある試みと、さらにはそれを告白してはばからない彼の率直な態度に、敬虔主義の枠をつき抜けてでた偉大な真理探究者のすがたを認めることは、容易であろう。

錬金術のほかにも彼は、シャフツベリ、ニュートン、スウェーデンボルク等を研究し、それがみづからの神学思想を補完し深化したと考えるが、しかしそれらの詳細を紹介する紙数の余裕はもはやない。

一七六二年、五番目の任地ヘレンベルクの監督牧師を勤めるエーティンガーの健康に変調がおこった。はじめ肋膜炎の兆候が現われていたが、ある会合のため小旅行をした無理がたたって、帰宅後はそれが肺病に進み、彼に生死の境をさまよさせた。幸いにある妙薬が効を奏して、彼は半年後に病床から起きあがることができた。この病気が恐らく彼に決心させたのであろう。彼は人々の要望を容れて、自叙伝の執筆にとりかかったのである（ただし一説には、病気のまえに書かれたとも言う）。

彼が六十年の人生をふり返ってみたとき、脳裏にさまざまな思いが、たとえば、もしも官吏になっていたならば立身出世をとげていたかも知れない、とか、「マールブルクのヴォルフのもとへ赴い」（71）ていたならば、当世流の哲学の大家になっていたかも知れないとか、あるいは、「牧職を回避するため、教授になりたいという誘惑に屈したかも知れない、教授になる手段も方法も見つけることができたろうから」（72）というような、実現しなかった可能性が思い浮んだにちがいない。しかし、自分は結局はいなか牧師になって神を知り神に仕える道を探索してきた、この思索の歩みこそ自分の人生なのだ、恐らくはそう考えて、自分の思想形成の過程を、そのそもその発端からもう一度たどってみたエーティンガーは、その形成手段として「三本の柱」（71）が厳然と立っていることを確認したのである。それは、「第一に、私が人間社会と自然から聞きとった根本英知、第二に聖書の真義と精神、そして第三には、この土台のうちに立つ私に対する神の導き」（71）であった。

彼はこの三本の柱を、表現を少し変えて、自叙伝の書名のしたに次のように書きそえた。『一神学者の現実、に合致した思想の成立史 一、巷にさけぶ英知の声、すなわち哲学により、二、聖書の真義と精神により、三、外的な神の

摂理による』(11)。この三本柱のいずれもが神による人間形成のための神の手段であり、このうちどれかが欠けていれば、『不完全かつ不十分な、他の人々を教えるのに不適当な、いや、それ自体不純な認識』(11)しか生れないというの、自分自身の思想形成の体験から生れた、エーティンガーの信念である。そしてこの信念の正しさを論証しようというのが、この本の目的であって、そのため彼はこの本全体を、分量的には極端に不均衡ながら三部に分け、『すべての思想は神の手段によって形成される』(11)と題する第一部で問題提起を行ない、第二部『神は何によって人間を教えるか』(12)において問題を論理的に分析する。これまで私たちが見てきた本来の自叙伝は、第三部にあたるもので、『幼年時代から、とちゅう中断がなくもなかったものの、この三つの手段を用いてきた一神学者の詳細な物語』(17)という題をもち、彼の信念を証明する事例の役割をになっているのである。

さて筆者は最初の部分で、エーティンガーの自叙伝は、単純なおとなし坊やが独創的な思想家に形成されていく教養物語である、と記した。エーティンガーはこの自叙伝の終り近くで次のように述べている。

「この巻にさげふ英知の声は、私たちにむかって呼びかける、人間だれしも二つのものを研究しなければならない、すなわち神と自分自身を認識しなければならない、と」(77)

彼よりも四十七年あとに生れたゲーテは、六十歳になってとりかかった自叙伝『詩と真実』の冒頭部分で、

「個人は自分と自分の時代を知らなくてはならない」⁽²⁾

と書いている。時代によって形成され教養された偉大な人生の物語が『詩と真実』とするならば、『一神学者の現実』に合致した思想の成立史』は、自分の教養のすべては神のたまものと考える人間の自叙伝である。

注

(一) Goethes Werke, Bd. 9, Hamburg 1955, S. 275. Johann Albrecht Bengel (1687—1752).

- (2) Albrecht Ritschl: Geschichte des Pietismus, Bd. 3, Der Pietismus in der lutherischen Kirche des 17. und 18. Jahrhunderts, Bonn 1886, S. 126.
- (3) Friedrich F. Fullenwider: Friedrich Christoph Oetinger — Wirkungen auf Literatur und Philosophie seiner Zeit, Göppingen 1975, S. 3.
- (4) 大分県立歴史館 (編) 『大分県史』(3) 大分県史の発展と変遷、大分県史の発展と変遷、1971。
- (5) Oetinger: Aufmunternde Gründe zur Lesung der Schriften Jakob Böhmes, 1731.
- (6) Ders.: Die unerforschlichen Wege der Herunterlassung Gottes..., 1735.
- (7) Friedrich Christoph Oetinger: Selbstbiographie. Genealogie der realen Gedanken eines Gottesgelehrten, hrsg. von J. Roessle, Metzingen 1961.
- (8) 母藤利男『ゲーテ・エッセイ——田代文政の課題と「文学研究」第七十輯——』(九州大学文学部「文学研究」第七十輯一九七三年) 田代文政の業績。
- (9) Francois Fenelon (1651—1715): Les aventures de Télémaque.
- (10) Augustinus (354—420): Confessiones.
- (11) August Hermann Francke (1663—1727): Anfang und Fortgang der Bekehrung A. H. Franckes von ihm selbst beschrieben.
- (12) Christian Wolff (1679—1754).
- (13) Nicole Malebranche (1638—1715).
- (14) Philipp Jacob Spener (1635—1705).
- (15) Jacob Böhme (1575—1624) 『ゲッティンゲン』の代表的な神秘主義者。
- (16) Sigrid Grossmann: Friedrich Christoph Oetingers Gottesvorstellung, Göttingen 1979, S. 60.
- (17) Jeanne Marie Bouvieres de la Mothe Guyon (1648—1717) 『ゲッティンゲン』の代表的な神秘主義者。
- (18) Johann Conrad Dippel (1673—1734) 『ゲッティンゲン』の代表的な神秘主義者。
- (19) August Gottlieb Spangenberg (1704—1792).

- (19) Nicolaus von Zinzendorf (1700—1760) の生涯については、伊藤利男『ツインツェンドルフ自画像』（九州大学文学部「文学研究」第七十四輯 昭和五十二年）を参照のこと。
- (20) A. G. Spangenberg: *Leben des Herrn Nicolaus Ludwig Graf und Herrn von Zinzendorf und Pottendorf*, Bd. III/IV, Faksimileausgabe, Hildesheim 1971, S. 816 f.
- (21) Ritschl, a. a. o., S. 135.
- (22) Goethe, a. a. o., S. 9.

付記 昭和五十七年十月七日岐阜市にて開催された日本独文学会研究発表会において口頭発表された『エーティンガーの自叙伝』は、本稿の要約によるものである。